

国土地理院 —地図と測量の科学館—

1997年6月16日、「地図と測量の科学館」を訪ねた。(以下「科学館」と略す)

「科学館」は、茨城県つくば市の建設省国土地理院の構内にあり、日本の地図と測量の情報発信基地となることを目的に、昨年6月1日に開館した施設である。

同館は、展示館・地球ひろば・情報サービス館の3つの施設から構成されている。「展示館」では、地図と測量の歴史や地球の最新精密な測定法等を、パネルや映像で解説したり、展示機器による体験をとおして理解できるようになっている。屋外にある「地球ひろば」には、20万分の1地勢図を印刷した2千枚のセラミックタイルを貼り合わせて制作された、つくば市を中心とした球体模型(直径21.5m)が設置されている。その上を東西南北と見渡しながら歩くと、地球の丸さと日本の領域が意外に広いことが実感できる。「情報サービス館」では、第二次世界大戦後から現在までに撮影された96万枚の空中写真(1948年までは米軍が撮影)、明治時代からの旧版地形図、それに世界各国のアトラス等が利用ができる。また、この館では国土地理院が実施した測量成果である「基準点成果」などの閲覧や謄本交付業務を行っている。

私たちが訪問した日には測量の日(6月3日)を記念した特別展示がおこなわれていた。その展示は、明治13年から19年にかけて作成された「第一軍管地方2万分の1迅速図原図」を複製した、関東平野全域と房総・三浦半島を対象とする921枚の地図をつなぎ合わせて床一面に

敷きつめたものであった。等高線、地形表現、市街地の状況や田畑を彩色で表現したフランス方式の地図で、水彩絵具で彩られた地図は、実用品ではなく美術工芸品のような印象を受けた。

「科学館」の見学後、国土地理院の庁舎を訪問し、宇宙技術を使った先端測量技術であるGPS(Global Positioning System)連続観測システムの説明を受けた。そのシステムは「電子基準点」の相対的な位置の変動を連続的に観測するものである。全国に約25キロ間隔で約900箇所の「電子基準点」を設置して、そこでの観測データが刻々と測地観測センターに集まり、解析処理され、連続的に地殻変動の監視をしているのである。地震や火山噴火の予測には、じわりじわりと進行する地殻変動を的確にとらえることが必要で、地震等の予知研究を進める上で「電子基準点」の提供するデータは重要な役割を果たしている。

今回、「科学館」と国土地理院の業務の一端を見学し、測地測量の役割が単に位置関係を表すための地図作製にとどまらず、多目的情報源としてさまざまな分野で重要になっていることを再認識する機会となった。

なお、国土地理院と地図と測量の科学館のインターネットのホームページアドレスは下記のとおりである。興味のある方はアクセスされてはいかがだろうか。

<http://www.gsi-mc.go.jp>

(小澤知子)